

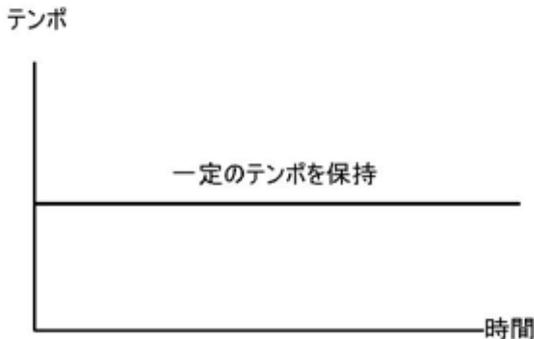
感性のデータ化(5)

テンポ変化(その4)

テンポの変化と言っても曲や解釈でいろいろとバリエーションがあります。そいくつかを類型化してみましょう。

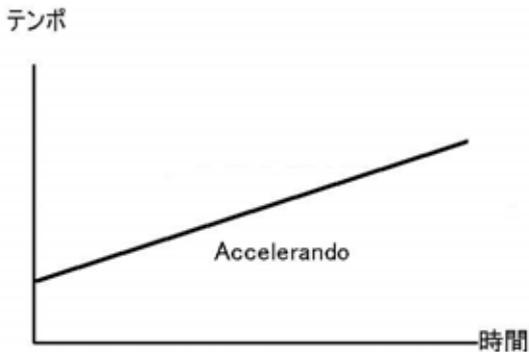
1. 厳格にテンポが保たれ終始変化がない型

殆どのポップスやダンスミュージックはこの型に含まれますが、バロックなどもこれに含まれると考えるのは誤解です。多くのバロック音楽は強弱による変化よりもテンポの揺れでニュアンスを表現しているからです。NHKの朝のラジオ体操の音楽ですら最近ではメトロノームのような演奏ではありません。運動の種類や動きに合わせてテンポを変化させています。

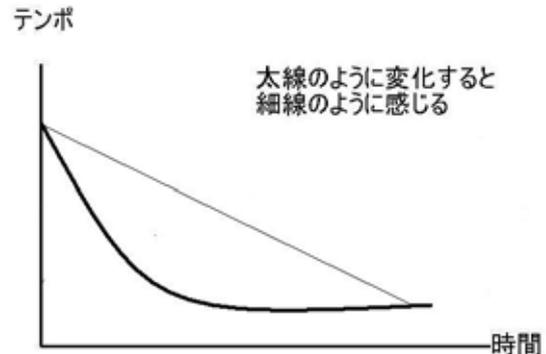
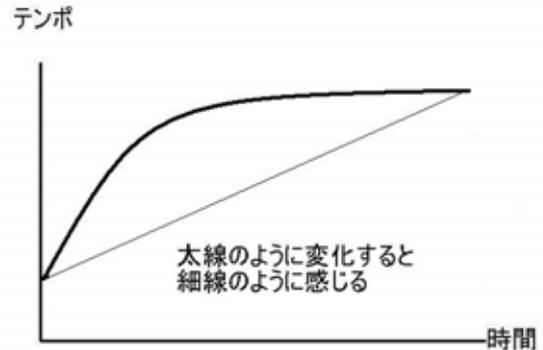


2. 少しずつ早く(遅く)なる型

ビゼーの「アルルの女」のファランドールは終わりに向かって少しずつテンポが上がってゆきます。

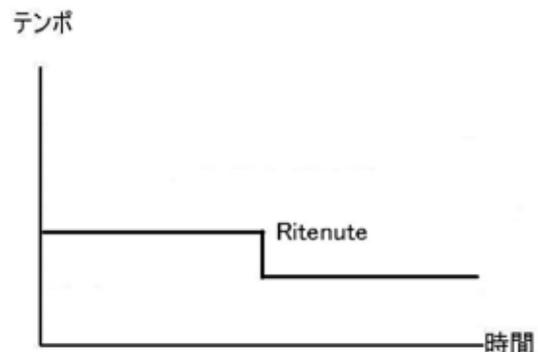


しかし、一般的に数十小節にわたらない程度の場合はこのようなりニアタイプではなく次のような二次曲線を用いる方が自然に聞こえます。通常テンポが変化するとき、音量も変化するのが普通です。その意味でも自然です。



3. 階段状の速度変化を持つ型

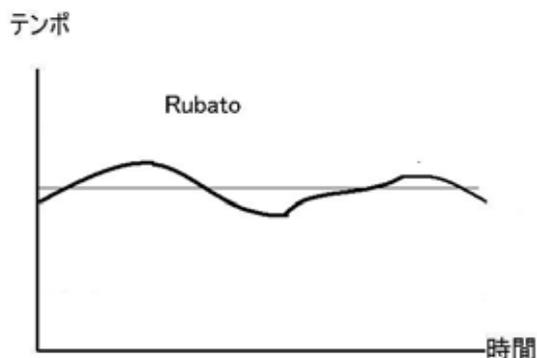
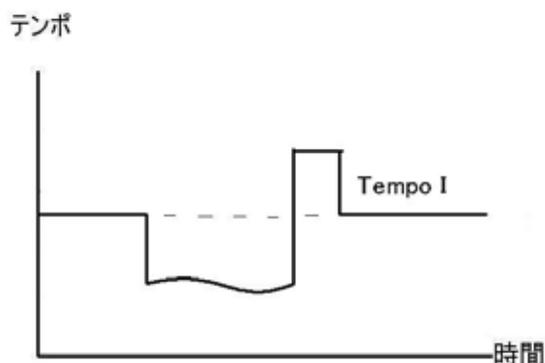
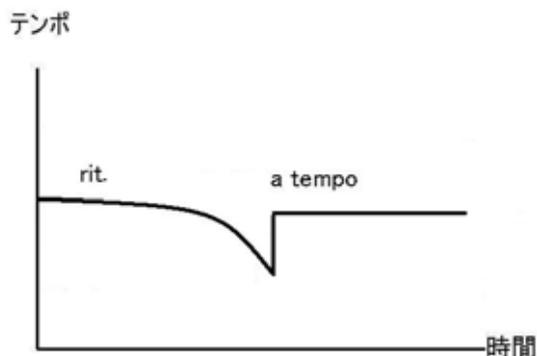
楽曲の中で複縦線で仕切られたブロックはしばしば調や速度がそこから変わります。これとよく似た Ritenute のように急激な垂直的な変化をする型です。



ブラームスのハンガリア舞曲によく出てくる [M e n o mosso] や [Piu lento] などこの型です。Piu (より多く) Molt (非常に) Poco (少し) Meno (より少なく) 等と一緒に使われる場合に用います。

4. 基本となるテンポを記憶している型

a tempoのように rit. の後で元のテンポに戻るような場合は基本となるテンポを常に記憶しています。

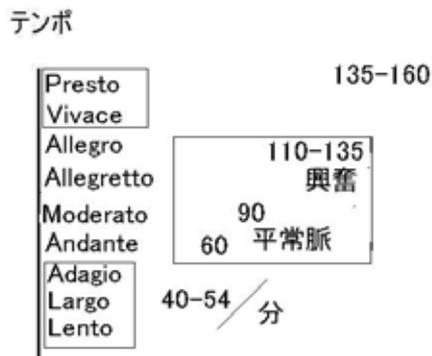


最後の Rubato は平均的にそのテンポを維持しているイメージですが、直前のテンポに戻るのが a tempo で、最初のテンポに戻るのが tempo です。このようなテンポ変化

をほとんどのシーケンスソフトではグラフィカルにえんぴつツールで手書きできるようになっています。(図の下部半分)

ベロシティーなどの音符とセットになっているデータと異なり、このテンポデータはマスタートラックに記録されますのでチャンネルやトラックごとに設定することはできません。

また、Interval という見落としそうな小さな窓に見える数字をデフォルトのままおくとなめらかで細かいテンポ設定はできませんので、メモリーが許す限り小さな数字に設定しましょう。



上の図で四角で囲んだ速度標語は人間の日常的な脈拍より高いか低い速度のものです。数字はメトロノームの数字ですが、あくまでも絶対的なものではありません。

リラックス効果や催眠効果を期待できるのは60以下でしょうし、高揚感や覚醒効果をきたいできるのは100以上でしょう。

テンポ変化の狙いはそのような心理的な効果すなわち情動を喚起することなのです。本来その曲が持つ固有のテンポを徒らにいじり回すことは避けねばなりません、名優の朗読が一本調子でないのと同様にきめ細かい設定はやり過ぎるくらいが必要です。

「いらっしやいませ」と言う受付嬢の挨拶も、「いらっしやいま__っせ」と言う感じの方が丁寧な気がします。

「1・2・3・4・」と等間隔のカウントの「3・4」の部分が「ませ」だとすると、「1・2・3・4」が「いらっしやいま__っせ」だと思うのです。

【rit.】の基本はこの「ま__っせ」だと思うのですが、「1・2・3・4・」を「1・2・3・4・」と拍の間隔を拓げるのではなく、有効な「3・4・」に変化を加え「1・2・3・4」みたいな感じが【rit.】だと思います。

等差級数による直線の変化を狙う時は、逆に等比級数である二次曲線(対数曲線やエクスポネンシャル)でデザインするとそれらしく聞こえるという心理的曲線を会得してください。

まず大づかみな全体のテンポ設定ができれば、段落の前後を編集します。これで結構できたような気がするのですが、実は仕上げは【フレーズ単位】の設定です。それこそ気の遠くなるような作業が待っているはずですが頑張ってください。

